

浦賀文化

令和4年(2022年)10月1日

第71号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

高坂小学校のベットローちゃん — 青い目の人形 —

日米友好の証として、昭和初期に贈られた「青い目の人形」が、今年で来日95年となる。横須賀の小学校や幼稚園にも贈られており、その記録は今も残されている。



校長室に一枚の写真が飾られています。なんとなく、ぎこちなさを感じる人物は、吉氷貫一校長先生、人形は、アメリカの子供たちから贈られた青い目の人形・ベットローちゃんです。

高坂小学校は、大正一五年(一九二六年)に開校した創立九六年の古い小学校です。当時三八才だった初代校長の吉氷先生は先生たちと協力して、子供たちの教育に励んだといひます。

ある時、高坂小学校出身の年配のご婦人からこんな話を聞きました。「朝会で、全児童に向かって校長先生が『平和のお使いのお名前は何?』と聞かれ、私たちは『ベットロー!、ベットロー!』と大声で叫んだことを覚えています」と。

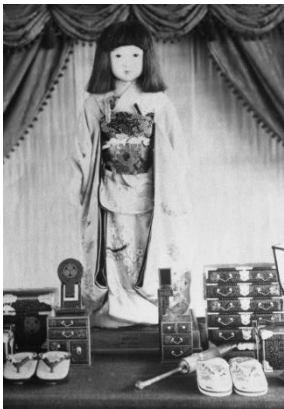
吉氷先生は、アメリカの子供たちから贈られた青い目の人形で世界の平和を子供たちに教えたかったのだと思ひます。

さて、青い目の人形を「存じでしょうか。今から九五年前に、アメリカの子供たちから約一万二七〇〇体の人形が友好の証として、日本の子供達に贈られたものです。そして、そのお礼として日本からも五八体の日本人形が贈られています。何かバランスが悪いような気がしますが、それは後ほどお話しします。

時は昭和二年(一九二七年)、世界は不景気の真つただ中でありました。安い賃金でも真摯に働く日系移民の労働者は、アメリカ人の労働力を損なう恐れがあるとして、激しい迫害を受けていました。そんななか、日米の対立を憂慮した親日家のギュリック牧師は、その懸念を文化的に和らげようと、『世界の平和は子供から』をスローガンに、子供たちに未来を託すことを提唱しました。「子供たちはお人形が好きだ」「日本にはひな祭りという行事がある」と、人形を通じての親善活動を全米の子供達に呼びかけました。募金やバザーの収益金などで廉価な人形を購入し、さらに家にある人形なども集めて、三月三日のひな祭りを目指して船便で日本に送ら

れました。届けられたたくさんの人形は、日本中の小学校や幼稚園などに広く贈られました。その一つがベットローちゃんです。

プレゼントは親しい人にするのが一般的ですが、前述したように両国間の情勢は最悪の状態でした。そんな中、草の根外交のはしりともいえる民間外交に立ち上がった人々がいました。その一人が渋沢栄一です。渋沢は、実業家としても立派な人物でしたが、終生社会活動にも携わり、青い目の人形による親善事業の受け手として、『国際児童親善会』を結成し会長に就任します。そこで、青い目の人形のお返しに考えたのが、答礼人形と呼ばれた、八〇センチもビックな日本人形でした。子供たちからも一銭ずつ集められ製作された人形は、まるで美術品のような大変精巧なつくりで、高価な衣装や調度品とともに、クリスマスに贈られました。ちなみに神奈川県の子供たちが送ったお人形は神奈子と呼ばれ、この写真も高坂小学校に保存されています。



さて高坂小にやってきた人形はその後どうなったでしょう。大歓迎を受けて学校に飾られた人形の行方は分からなくなりました。それは、後に始まった戦争により『敵性スパイ人形』として壊されたり、燃やされたりしたからです。ベットローちゃんもその一体だったかもしれせん。しかし、中にはそっと隠された人形もあり、全国で約三三〇体が見つかっています。残念ながら横須賀にはありませんが、三浦半島では葉山小学校のメリーさんが見つかっており、今でも校長室に飾られています。

この葉山小学校で昭和一三年から戦後の二一年まで校長を務めていたのが、吉氷先生で、高坂小の次に赴任した浦賀小学校にも人形があったといい、青い目の人形と大変縁の深い先生だったようです。

戦後、いつの間にか人形のこととは忘れさられ、しばらくして突然人形が発見されるようになります。今、葉山小学校の校長室に飾られているメリーさんの経緯はよくわかりませんが、想像をたくましくすれば、吉氷先生の指示によるものだったのかもしれない。(仲野 正美)

※今号と次号は、仲野正美さんに担当いただきます。よろしくお願ひします。

★参考資料
・追悼吉氷貫一
・至誠一貫他



歴史 語らい座

浦賀奉行所編 その二十一

郷土史家 山本 詔一



●尾張会所の設置計画●

一九世紀に入ったところから、尾張国の知多半島の浦々を拠点とした廻船が、大阪―江戸間の物流に大きな変化をもたらした。

こうした時流に乗ったものか、安政四年（一八五七年）八月、江戸南新堀（現中央区新川）で干鰯や米穀を商っていた大和屋市兵衛という商人から、「浦賀に尾張藩の廻船をすべて掌握する会所を開きたい」という願書が尾張藩上屋敷に提出された。

浦賀に入津した船が船改めを終え日和見（風や潮待ち）などでしばらく浦賀に停泊した時に船頭や乗組員らが宿泊するのが『船宿』である。そこでは、水主と呼ばれる乗組員らが上陸する際の身分保障や積み荷の売買交渉などの面倒もみており、廻船ごとに決まった船宿があった。

大和屋が目論んだのは、浦賀に『会所』を開設し、尾張の廻船の船宿業務を一手に引き受けることであった。大和屋の願書によれば、「尾張の廻船数は二五〇隻ほどあり、年に五往復ほどしている。これを引き受けている浦賀の船宿は三軒から四軒。これらすべてを会所で引き受ければ、宿泊や飲食に必要な経費を差し引いても五〇〇両ぐらいの上納金を毎年尾

張藩に差し出すことができる」「浦賀における積み荷の売買で得た手数料については、私どもの生活費や従業員への給与とさせていただきます。こちらも軌道に乗れば、生活費の残りは全て上納する」と言っている。

また尾張藩会所を置くことで、異国船来航時の藩の役人の宿泊施設にもなり、いち早く情報を流すこともできるとし、一石何鳥でもあることを強調した。さらに大和屋は、「この会所を『尾張藩会所』という公式なものにする、浦賀奉行所への届け出など、種々面倒で手間もかかる。表向きは、『尾張藩廻船御用達』ということとして、準備を進めるのはどうか」と伺いを立て、「このやり方は、加賀藩から廻船御用達を命ぜられ、浦賀で加賀藩の廻船の管理をしている掛塚屋権七という私の弟が既に行っている方法で、その時の申請書類の写しとノウハウは弟から受けている。あとは尾張藩の御威光で浦賀奉行所への手続きは簡単に済むことと思われる」と認めた。

この構想は東西浦賀の商人・船宿の強靱な反対にあった。西から江戸屋六兵衛・松崎屋与兵衛、東からは木屋市兵衛・加茂屋勘兵衛が代表となり、まず大和屋の素性の調査を始めた。その結果、江戸での実績もそれほどではなく、信用という点では

いささか難点の多い商人であること突き止めた。さらに、浦賀における尾張廻船と浦賀の商人とのつながりについて、尾張廻船の代表格である内海船が運んでくる商品をどこでどのくらい捌けるのかなどの適格な情報提供をしていることや、東北からの荷物を江戸ではなく、浦賀で積み替えをして、内海船で関西方面へ送る手はずを整えるなど、浦賀の商人でなければできない信頼関係が構築されていることも明かになった。このような実情は、廻船側からも支持されるものであった。この事実が浦賀奉行所を経由して、尾張藩へ伝えられた。

一年以上も続いた大和屋と浦賀の商人との抗争は、「大和屋が提案した額までではできなくとも、いくらかのものを上納してもらえれば…」という尾張藩側からの逆提案を浦賀の商人が飲む形で落着した。

俳句の散歩道

灯明堂蟬の声降る磯伝ひ 鈴木 ひろ

夕虹やぼんぼん船のゆく渡し 大塚遊球子

笑話 一題

これからの季節、魚に脂が乗り、果実がたわなに実り、たつぷりと大地の栄養を蓄えた根菜類、山には自然薯や香り高いキノコが生ずる。食いしん坊の私にはたまらない季節である。これら旬の食材たちが出回ると、栗ご飯が食べたい」と手を黒くして皮と渋皮を剥き、銀杏を買ってきては銀杏だらけの茶碗蒸しを作るのである。キノコの王様松茸は、食べたい欲求と値段との葛藤が始まり値段の高さに負けて買うのを諦めるのが常である。天然物の舞茸は目が飛び出るほど高いが香りと味は天下第一品！地鶏と舞茸の鍋、炊き込みご飯は好物の一つでもある。

かぼちゃは冬至に食べるが、冬が旬ではない。なぜ？と疑問を感じ調べてみると、冬至（冬）の七草なるものが出てきた。春や秋は耳にするが、冬は今まで聞いた記憶が無い。なんきん、れんこん、にんじん、ぎんなん、きんかん、かんでん、うんどん（鱈鮓）。名前に「運」が二つ重なる「運盛り」食材。これらを冬に食って運を呼び込むのだ。うだ。とても日本人らしい運の扱い方。今年の冬至には冬の七草なるものを食って運氣をもりもり呼び込みたいものだ。（ハマー）

*** 歴史講座 *** 浦賀奉行所の終焉と 浦賀の町のゆくえ

日時：11/30・12/7・14・21
13：30～15：30（毎水曜日）
場所：浦賀コミセン分館
定員：抽選40名
締切：11月14日（月）必着
講師：山本詔一氏
*詳細は、チラシをご覧ください。

お申し込みは
こちらから
（電子申請）



URL 変更になりました

<http://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/2752/uragabunka/>
浦賀文化のバックナンバーはこちらから→



浦賀文化